

次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

和泉式部、保昌が^①妻にて丹後に下りけるほどに、京に歌合ありけるに、小式部内侍、^A歌詠みにとられて詠みけるを、定頼中納言たはぶれて、小式部内侍ありけるに、「^B丹後へ遣はしける人は参りたりや。いかに¹心もとなく思すらむ。」と言ひて、局の前を過ぎられけるを、^②御簾よりなからばかり出でて、わづかに^③直衣の袖をひかへて、

大江山いくの道の遠ければまたふみも見ず天の橋立

と詠みかけけり。思はずに、²あさましくて、「こはいかに。^Cかかるやうやはある。」とばかり言ひて、返歌にも及ばず、^D袖を引き放ちて、逃げられけり。小式部、これより歌詠みの世に。^Eおぼえ出で来にけり。

これはうちまかせての^E理運のことなれども、かの卿の心には、^Fこれほどの歌、ただいま詠み出だすべしとは^G知られざりけるにや。

問 二重傍線部①～③の読みを、それぞれ現代仮名遣いで答えよ。 知

答 ① め ② みす ③ のうし(なおし)

問 波線部1～3の意味を、それぞれ答えよ。ただし、活用語は終止形で答えること。 知

答 1 待ち遠しい 2 驚きあきれたことだ 3 名声

問 傍線部Aの説明として最も適当なものを、次から選べ。 思

- ア 歌合のために詠んだ和歌を横取りされたということ。
- イ 歌合に出る歌人の一人として選出されたということ。
- ウ 歌合で詠進した和歌が高く評価されたということ。
- エ 歌合に出る別の歌人のために和歌を代作したということ。
- オ 歌合に出るような高名な歌人の妻となったということ。

答 イ

問 傍線部B・C・Gを、それぞれ現代語訳せよ。 思

答 B 丹後へおやりになった人は参上したか。 C このようなことがあるのか、いや、あるはずがない。 G お気づきにならなかったのであろうか。

問 破線部の和歌にある二つの掛詞について、どの語に何と何が掛けられているかを、それぞれ説明せよ。 **思**

答 「いくの」に地名の「生野」と「行く野」が掛けられている。／「ふみ」に「踏み」と「文」が掛けられている。

問 傍線部Dについて、定頼中納言が「逃げ」たのはなぜか。五十字以内で説明せよ。 **思**

答 小式部内侍がすぐにすばらしい和歌を作るとは予想しておらず、返歌を詠むこともできないほどに驚いたから。(50字)

問 傍線部Eのように編者が言うのはなぜか。最も適当なものを、次から選べ。 **思**

A 小式部内侍はまだ歌人として無名ではあるが、根拠もないことだからかわれたら悔しい思いをするのは当然だから。

I 小式部内侍は歌合に出詠の準備をしていたので、定頼中納言に対してすぐに和歌を示すことができるのは当然だから。

ウ 小式部内侍は母親が歌人として有名な和泉式部であり、その後の活躍を思えば当然即妙の和歌を詠むのは当然だから。

E 小式部内侍はその即興で作った和歌のすばらしさから考えて、後世に歌人として高く評価されるのは当然だから。

オ 小式部内侍は幼いときから母の和泉式部に歌の指南を受けており、和歌に関する深い教養があることは当然だから。

答 ウ

問 傍線部Fとあるが、編者は「大江山」の和歌のどのような点を評価しているのか。説明せよ。 **思**

答 和歌の中に巧みに掛詞を織り込んで、母に代作を頼んだり応援を求めたりしていないことをすばやく歌にして伝えている点。

問 本文の出典『十訓抄』は、説話を十の教訓に分類して整理した説話集である。本文はどのような教訓に分類されるか。最も適当なものを、次から選べ。 **思**

A 人倫を侮るべからざる事

I 朋友を撰ぶべき事

ウ 思慮を専らとすべき事

E 諸事を堪忍すべき事

オ 懇望を停むべき事

答 ア

■十訓抄 大江山 発展問題（比べ読み）

次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

歌の、八つの病の中に、^A後悔の病といふ病あり。歌、すみやか¹に詠み出だして、人にも語り、書いても出だして後に、よき言葉、節を思ひ寄りて、かく言はでなどと思ひて、悔い妬がるをいふなり。されば、なほ、歌を詠まむには、急ぐまじきがよきなり。いまだ、昔より、とく詠める²にかしこきことなし。されば、^①貫之などは、歌一つを、十日二十日などにこそ詠みけれ。

しかはあれど、折に従ひ、事にぞよるべき。

大江山いくのの里の遠ければふみもまだみず天の橋立

これは、小式部内侍といへる人の歌なり。事の起こりは、小式部内侍は、和泉式部が娘なり。親の式部が、保昌が妻にて、丹後に下りけるほどに、都に歌合のありけるに、小式部内侍、歌詠みにとられて詠みけるほど、四条中納言定頼といへるは、四条大納言^②公任の子なり。その人の、戯れて、小式部内侍のありけるに、「丹後へ遣はしけむ人は、帰りまうで来³にけむや。いかに心もとなく思すらむ。」と、妬がらせむと申しかけて、立ちければ、内侍、御簾よりなから出でて、わづかに直衣の袖をひかへて、この歌を詠みかけければ、いかにかかるやうはあるとて、つい居て、この歌の返しせむとて、しばしは思ひけれど、^Bえ思ひ得ざりければ、引き張り逃げにけり。これを思へば、心とく詠めるもめでたし。

〔俊頼髄脳〕

*節：趣向。

問 波線部1く3の「に」の文法的説明として最も適当なものを、それぞれ選べ。知

- ア ナ行変格活用動詞の連用形活用語尾 イ ナリ活用形容動詞の連用形活用語尾 ウ 断定の助動詞「なり」の連用形
エ 完了の助動詞「ぬ」の連用形 オ 格助詞 カ 接続助詞

答 1 イ 2 オ 3 エ

問 二重傍線部①・②の人物が撰者となった作品を、それぞれ選べ。知

- ア 和漢朗詠集 イ 菟玖波集 ウ 古今和歌集 エ 千載和歌集 オ 新古今和歌集 カ 山家集

答 ① ウ ② ア

問 傍線部Aとはどういうことか。六十字以内で説明せよ。思

答 歌を急いで詠んで人に語ったり書き送ったりした後、よりよい言葉や趣向を思いつき、こう詠まなくて残念だったと悔しがること。(60字)

問 傍線部Bを現代語訳せよ。思

問

以下は『十訓抄』とこの文章とを比べ読みした後の教室での会話である。これを読んで、空欄Ⅰと空欄Ⅱに入れるのに最も適当なものを、後から選べ。思
教師——『俊頼髓脳』は平安時代後期に成立した歌論書で、当時の関白の娘を教育するために書かれたと言われています。「大江山」の逸話をどうとらえてい
るか、『十訓抄』との違いについて考えてみましょう。

生徒A—第一段落では「後悔の病」について述べていて、「歌を詠まむには、急ぐまじきがよきなり。」と自説を展開しているね。

生徒B—それに続けて「大江山」の逸話を紹介しているけど、これは小式部内侍が秀歌を即座に詠んだという話だよ。第一段落とどうつながるんだろう。

生徒C—**Ⅰ**ということをおもうとしているんじゃないかな。

生徒D—『十訓抄』の方は、「かの卿の心には、これほどの歌、ただいま詠み出だすべしとは知られざりけるにや。」と定頼への批判に力点があるけど、『俊頼
髓脳』にはそういう主張は見当たらないね。

教師——同じエピソードでも、説話と歌論書では解釈の仕方が異なるのですね。もう一つ、平安時代後期の歌論書に『袋草紙』というものがあります。この
中には「白紙を置く作法」というものが記されており、歌会などでどうしても歌を詠めないときは白紙を置いて退出することが認められていたとされてい
ます。『袋草紙』ではそれに続けて「およそ名を得たる人は、なかなかのこと言ひ出ださんよりは、遁避するとんび一の事なり。」と書かれており、その後と同じ
「大江山」の逸話を収録しています。この『袋草紙』の文脈では、「大江山」のエピソードの定頼はどう評価されていることになりましたか。

生徒E—**Ⅱ**ということですね。同じ逸話でも、何に焦点を当てるかで三者三様のとらえ方がされていて、興味深いなと思いました。

Ⅰ 歌を普段は長時間かけて作っていても、即詠が必要な場面では的確に対応できるのがすぐれた歌人の条件だ

イ 歌を急いで詠むと後悔の病に陥りがちではあるが、時にはあえてその危険を冒さなければならぬ場合もある

ウ 歌を詠むのが速いか遅いかということよりも、詠んだ歌が時節や場面にかなっているかどうか重要だ

エ 歌はじっくり詠むほど出来がよくなることが多いが、場の状況に合わせて即興で詠む方が得意な歌人もいる

オ 歌は急いで詠まない方がよい結果になるものだが、時と場合によっては急いで詠む方がよい事例もある

Ⅱ Ⅰ 即座に返歌をしようとせずに、時間をかけて歌を詠もうとした定頼の考え方には納得できる

イ 小式部内侍から詠みかけられた歌に対し、返事もせずに逃げ出した定頼は歌人としての資質に欠ける

ウ 急いで中途半端な返歌をすることは控えて、その場をただ立ち去った定頼の態度は称賛すべきだ

エ 白紙を置く作法になぞらえて、あえて小式部には返歌をせずに行ってしまった定頼は博識だ

オ ありきたりの返歌では歌人としての名声を失うと恐れ、小式部内侍の前から逃亡した定頼は弱虫だ

答 思いつくことができなかったので、

答

Ⅰ オ Ⅱ ウ